

「葛城」という能には、いろいろ問題があります。

まず素材、出典です。この能が葛城の神・言主の神が役の行者に、葛城から大峰まで法の岩橋を架けるよう命ぜられたが、神は容貌の醜いのを恥じて、夜だけしか仕事をせず、完成しなかったので、行者の怒りにふれて呪縛されたという伝説に拠って作られています。この説話は『日本霊異記』や『今昔物語』巻十一、『源平盛衰記』巻二十八、『続日本記』など、かなり広い分野の諸書にとりあげられています。しかし能「葛城」が本説として取り上げたのは「俊頼髓脳」という歌学書であろうとされています。これまで能の本説を、いきなり『今昔物語』や『日本霊異記』などの近似の説話の載っている文学書にすえることが多かったのですが、『俊頼髓脳』という歌論書の存在に注目し、和歌の註釈に際して、そのもととなった説話に関する解説が、より能の創作に直接的に影響したのではないかと指摘されたのは、伊藤正義先生だと思えます。他の書物より『俊頼髓脳』が能作者（特に世阿弥）が親しんでいたことを繰り返し述べ、その点を強調されたので、かなり一般的となりました。

次に作者、これまでの『能本作者註文』『いろは作者註文』『歌謡作者考』『自家伝抄』『二百拾番謠目録』等、従来の

作者考では、すべて世阿弥作としています。『いろは作者註文』は別名「雪葛城」を作者名なく再録、また『自家伝抄』では世阿弥作の項に「雪葛城」と記している一方、「世阿弥へ重ねて所望の分」という四十五番のなかでは「葛城」と記しています。というようにいづれも（世阿弥作）とされ、異説はありませんでした。しかし、世阿弥自身、これを認証するような記事を残している訳でもありません。それで戦後のきびしい作者研究では、世阿弥作からははずされ（作者不詳）とするのが妥当ではないかとされています。

世阿弥の死後二十二年、寛正六（一四六五）年二月の将軍院参の能に、観世座（音阿弥、政盛）が上演した記録があるので、かなり古くからある能ではあったようです。しかし内容を見当すると、香西精氏は《作品そのものに決定的な世阿弥らしさが内在しているとは思えない》、禪好みの詞章も《世阿弥と決定させるほどのものではなさそうである》といひ、また《逆に世阿弥らしからぬものとして目に付くのは、折角、葛城山という名所を素材にしなから、「遠見を本とする」敘景のないこと》やクセのトメで《「身を休めたまへや、御身を休めたまへや」と返しているのは、彼のクセの構成から見えて異例であり、「重点どめ」をいましめている『曲付書』の主

張と喰いちがうなど、彼の作能術の理論に反している」と否定的です。『能謡新考』「II 作者と本説」一方、伊藤正義氏は『俊頼髓脳』の影響、天の岩戸説話への関心（『別紙口伝』『拾玉得花』など）なかんづく「次第」と終結部が呼応する一貫性、統一のイメージなど、世阿弥の特徴が多々指摘できる（新潮日本古典集成『謡曲集』上解題）と肯定的です。

因みに西・祥氏は『日本古典文学大辞典』で『世阿弥とするが定かではない』という中間説をとり、羽田昶氏は『能狂言事典』で「作者・世阿弥」とされています。

ところで、作品としてはどういう構成・筋立になっているか、あらずじは次の通りです。

出羽国（山形県）の羽黒山から出た山伏（ワキ）が、大和国（奈良県）の葛城山へとやって来ます。折しも降りしきる雪に悩んでいると二人の里女（前シテ）が現れ、彼女の庵に案内し、焚火をしてもてなしてくれまします。そして、雪の中で集めて束にした木々の細枝を標（しもと）と呼ぶのだとい、標結ぶ葛城山に降る雪は、間なく時なく思ほゆるかな」という古歌があると教えてくれます。山伏は好意を謝し、やがて後夜の勤行を始めようとすると、女は、お勤めのついでに加持祈祷をして自分の三熱の苦しみを助けて下さいと頼みます。山伏は不審に思つて、その素性を尋ねると、自分は葛城の神であるが、昔、役の行者に命ぜられた岩橋を架けなかつたため、不動明王の索に縛られ苦しんでいるのだと言つて消え失せます。（中入り）そこへ麓の男（アイ）が上つて来たので、葛城山の岩橋のことについて尋ねます。その話を聞き、先程

の女の事など思いあわせ、奇特なことと思ひ、夜もすがら女神のために祈祷します。すると、その修法にひかれて、葛城の神（後シテ）が現れ、三熱の苦を免れた喜びを述べ、大和舞をまい、暁近くなると、岩戸の内へ姿をかくします。

葛城山の神・言主神は鴨氏の祭神で、吉事も凶事も一言で託宣したという神で、葛城山へ巡幸して来た雄略天皇を一喝して、恐れさせたという事です。尤も、二人が仲良く狩猟を楽しんだ話（日本書紀）や雄略天皇に土佐に流された（旧事記）といった説もあります。いづれにしても男神です。しかし能作者は女神として扱っています。神様であるのに役の行者にこき使われて、呪縛され、山伏に助けを乞います。（能「三輪」も本来男神である筈が、女神として描かれ、僧侶に助けを乞います。）近代人の合理主義では一寸理解のとどきにくいところがありますが、能作者はそうしたさかしらを無視して、魅力的な能を作り上げています。（もともと『枕草子』や『和泉式部日記』の記述から、平安朝の宮廷では、葛城の神を女と見る伝承が、能以前にすでにあったのかも知れない、という報告もなされています。『岩波講座 能・狂言』II）

この能の主題は、葛城の神が雪におおわれた山で岩戸の神楽として、大和舞をまうところにあります。静かな詩情の漂う、雪が主役ともいえる冬の代表曲、とする説（西・祥氏）すらあります。

核となるのは『古今集』巻二十、大歌所大歌の部に、《古き大和舞の歌》と題して採録されている

しもとゆふ葛城山にふる雪の

まなく時なくおもほるかな

です。前句は「間なく時なく」を引き出すための序で、絶え間なく思ひわたるといふ恋歌ですが、能では「ふる雪は」として雪そのものに重点がおかれています。そして《大和舞ノ歌ト云者、天照大神アマノイハ戸ニ籠セシ時、神達、天岩戸ニテ歌テヨビ奉シ神歌也》。大和舞トハ日本ノ舞也、俗人ノ舞ハ唐舞也》(『古今集註』)などに見られる中世での理解がベースにあります。

《かづらき、よき能》と金春禅鳳は『聞書雑談』の中でもらしています。しかし雪中だし、呼び掛けの出は当然かも知れないが、あたりの景色を謡った二声で出るのもよいのではないかと、一寸残念そうなお口ぶりも添えています。

雪中ということで、笠に雪をつけ、雪のついたシモトを持っています。観世流の《大和舞》の小書の場合は、雪山の作り物が出て、その中へ(中入り)します。

《神楽》の小書は下掛り系(金剛・喜多流)のものです。(宝生流は大和舞・神楽の二つあります。)

いづれの流儀でも「葛城」の小書は重く扱われていますが、金剛流では特に重い習いとされています。前場は、ほぼ常の通りですが、扮装は雪笠にシモトを背負い、杖をついて出ます。

前述した呼びかけの出やシモトを焚いて山伏をもてなし、述懐する所に情趣があります。シテは幕へ中入りし、雪山は

出しません。後場になり、後シテは白地の長絹を着、天冠に葛葛をつけ、櫛の杖を持つて出ます。常の《序之舞》が、序無し(《神楽》)に変わり、「翁」のように天地人の拍子を踏みます。(《神楽》のあと「高天の原の、岩戸の舞」に続き、短い舞(二ノ舞)が入り、シテは橋掛りへゆき、囃子の流シの手にのつて舞台に戻り、位が静まって、返し「高天原の岩戸の舞」につづきます。キリの謡にも緩急があり、「明けぬ先にと葛城の」の謡の間に幕に入り、「岩戸にぞ入り給ふ」と静かに幕をおろして、ワキが留めます。

間の里人が、何度も葛城山へ峯入りしている山伏に、始祖役ノ行者の話をするのは、やや不自然です。(「敦盛」も、浦人が熊谷蓮生坊に敦盛の最後を語るのも同様です。)いづれも、ワキの方が詳しく知っているのですから、ワキの方がアイに説明してやる別の《脇の語り》の演出があったようです。

『隣忠秘抄』には《本装束は腰巻水衣肩上也。替は腰巻に箔又は厚板を壺折にする。但しこの形宜き故今の世に多くは壺折にする。白無地の練などを着る人あり。雪中の故ならん。然しこれはあまり入り過ぎしやうなり。雪中とて水衣白きなどは着ぬことなり。無地の白を着るは幽霊の類なり。かような所に心つかず、雪中とばかり心得えたるはサイドウ畑(?)ならんか。》と記しています。文末の意味は一寸不明ですが、《雪中だからと言って白を着るな》というのは、少々強引で、やはり、演者にしても観客にしても、白っぽい方が、雪中の感じは深まります。